

# 阿嘉島の蝶 part3

## スジグロカバマダラとツمامラサキマダラの飛来

上林利寛

AMSL 調理担当

Butterflies in Akajima Island, Part3

T. Kamibayashi

1994年11月3日、良く晴れた昼下がり、研究所の近くの畑で見慣れない2頭の蝶が飛び交っていました。私はすぐそれがスジグロカバマダラ（マダラチョウ科）であることに気づきました（写真1）。スジグロカバマダラは沖縄では比較的ポピュラーな蝶ですが、土着分布は宮古・八重山諸島までで、沖縄島以北には、迷蝶として風に運ばれてくるようです。研究所の近辺では、この日から約2ヶ月間にわたって、本種のまとまった集団を観察することができました。しかし、ほとんどの個体は翅が傷ついており、新鮮なものはいませんでした。飼育下でのスジグロカバマダラの寿命は20~30日とされていることから、この2ヶ月の間、古い個体が死に、新たに島に飛来してくる個体と順次入れ替わっていたものと思われます。本種の幼虫の食草としてリュウキュウガシワ（ガガイモ科）が知られていますが、その分布は宮古・八重山諸島に限られています。このことが、沖縄以北で繁殖が確認されない理由なのでしょう。



写真1. スジグロカバマダラの雄。雄は後翅の翅脈上に性標がある。写真で見ると黒く縁取られた白い斑点がそうで、雌にはない。

一方、同じマダラチョウ科のツمامラサキマダラは台湾からの迷蝶とされていますが、阿嘉島では昨年11月中旬から12月にかけて例年になく多数が確



写真2. ツمامラサキマダラの終齢幼虫。食樹はリュウキュウテイカカズラ（キョウチクトウ科）の他、クワ科のガジュマルやオオイタビなどの報告がある。

認され、雄2匹と雌3匹を採集することができました。また、リュウキュウテイカカズラ（キョウチクトウ科）で本種のものと思われる幼生（写真2）が発見されました。私の持っているどの図鑑にもツمامラサキマダラの幼虫に関する詳しい記述はありませんでしたが、マダラチョウ科の特徴である立派な肉角があり、他のマダラチョウ科の幼虫と色や模様が違っていたので、ツمامラサキマダラの幼虫だと推定しました。この幼虫は8本の肉角をもち、オオゴマダラの幼虫を想わせます。とてもデリケートで、とまり木に少し指が触れるだけでも頭部をくると丸め、肉角を際立たせ、威嚇のポーズをとりました。そして、飼育の結果、5個体中4個体が無事蛹化に成功し、10~11日間で羽化して立派なツمامラサキマダラ（すべて雌）になりました。

1995年2月現在、阿嘉島は例年に比べて冷え込みが厳しく、飛び交う蝶の姿もほとんど見かけなくなりました。彼らが無事に越冬し、子孫を残して、春にはまた多くの蝶に出会えることを心待ちにしています。